

『アフリカレポート』で読むアフリカの選挙

岸真由美

この数年、アフリカでは大統領選挙や国民議会選挙などの重要な選挙が続いている。一例を挙げると、二〇一三年のケニア総選挙、二〇一四年の南アフリカ総選挙、二〇一五年のエチオピア総選挙やナイジェリア、タンザニアの大統領選挙などである。二〇一六年も引き続き十数カ国で選挙が予定されている。そこで本稿では、アフリカの選挙を読み解く視点を提供する資料として、当研究所が発行する専門誌『アフリカレポート』に掲載された論考・時事解説を数点紹介したい。

二〇一三年三月に実施されたケニア総選挙は、大統領、国民議会をはじめとする六つの選挙が同時に実施される史上初の選挙となった。加えて、前回の大統領選挙の時(二〇〇七年一月)に開票結果と現職大統領の再選をめぐる発生した暴動(「ケニア危機」)後初めての大統領選挙であった。ケニア危機では、現職大統領であったキバキ氏の出身民族で一般的にキバキ氏支持とみなされているキクユ人への襲撃が発生し、一〇〇〇人以上が亡くなり、多数の国内難民を出した。津田みわ「二〇〇七年ケニア総選挙後の危機」(特集 アフリカの政治不安再び?)『アフリカレポート』四七号

(二〇〇八年九月)は、こうした前回選挙の状況と暴動の経緯についての詳細な報告と分析である。二〇一三年の総選挙は集計時の技術的問題などありつつも、前回同様の混乱に対する海外のメディアの懸念にもかかわらず総じて平和裡に行われた。二〇一三年総選挙の報告は本誌本号の津田氏の特集記事を、また次回総選挙の日程調整に向けた動きについては、津田みわ「任期問題に揺れるケニア国会——紛争後制度構築の課題——」『アフリカレポート』五四号(二〇一六年)をお読みいただきたい。

二〇一四年五月、南アフリカでは国民議会と州議会の選挙が実施された。今回の選挙は全人種参加で実施される五回目の選挙で、アパルトヘイト撤廃後に生まれた世代が初めて参加する選挙であった。南アフリカではアパルトヘイト撤廃の一九九四年以来、故ネルソン・マンデラ元大統領が率い、解放闘争を戦ったアフリカ民族会議(ANC)が与党として政権を担っている。二〇一四年の選挙でもANCは約六二%の得票率で圧勝し、党首ズマ氏が大統領に再選された。しかしANCは前回選挙より得票率を下げっており、代わりに野党第一党の民主同盟(DA)が初

めて二〇%を超える得票率を得て議席を伸ばした。佐藤千鶴子「二〇一四年南アフリカ選挙——民主同盟の支持率拡大——」『アフリカレポート』五二号(二〇一四年)は、DAの支持率拡大の背景や支持基盤を分析し、白人リベラル層や白人ミドルクラスを支持基盤として拡大を図ってきたことを明らかにしている。牧野久美子「南アフリカ二〇一四年総選挙と第二次ズマ政権発足」『アフリカレポート』五二号(二〇一四年)は、第二次ズマ政権の閣僚人事を概観し、ズマ氏が大統領二期目をまっとうできるかどうかは野党への対処以上に党内での舵取り如何にかかっていると指摘している。

二〇一五年のナイジェリア大統領選挙では、現職のジョナサン候補を破ってブハリ候補が大統領に当選し、総選挙では一六年間与党の座にあった人民民主党(PDP)から野党第一党であった全進歩会議(APC)への政権交代が民政移管後初めて実現した。玉井隆「二〇一五年ナイジェリア選挙——政権交代の背景とブハリ次期大統領の課題——」『アフリカレポート』五三三号(二〇一五年)は、ジョナサン氏の支持率低迷とブハリ氏の支持率拡大の背景を分析し、今後のブハリ政権の課題について解説している。

同年のエチオピア総選挙については、児玉由佳「二〇一五年エチオピア総選挙——現政権圧勝後の展望——

——」『アフリカレポート』五三三号(二〇一五年)が国会下院選挙の結果を分析し、一九九五年の連邦共和制以来与党の座にあるエチオピア人民革命民主戦線(EPRDF)の圧倒的勝利の背景に、順調な経済成長に対する国民の評価と与党に対抗する勢力への抑圧的政策の効果があることを明らかにしている。

二〇一六年二月、ウガンダでは三〇年にわたって政権の座にあるムセベニ大統領の五期目の再選が決まった。同じく二月、中央アフリカでは、三年の実質無政府状態のあと初めてとなる大統領選挙が実施された。今年はガーナやコンゴ民主共和国でも選挙がある。まだまだアフリカの選挙から目が離せない。

(きし まゆみ/アジア経済研究所 図書館)